
幽玄回廊

零/Rey

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幽玄回廊

【Nコード】

N0637X

【作者名】

零/Rey

【あらすじ】

エミグレ文書を使ってアリスを復活させようとした後、悪夢に悩まされるウル。彼は悪夢を見ないために睡眠を拒否するという手段を取る。日に日に弱っていく彼を心配した仲間たちは彼を強制的に眠らせたのはいいが…

過去にコピー本出だしたものの再録です。

老章 禁忌

ウェールズのはずれにある崖の先端に、かつて政治的策略によって敗れた罪のない者達を一生投獄しておく呪われた修道院の跡地があった。怨念漂うその場所は、忌み嫌われる場所としてだれも住もうとはしないところであるにもかかわらず、一人の老人が住居を構えていた。その老人は、ヴァチカンの秘術を自らに使い不死となった魔術師で無限となった自分の時間を有効に使って多種多様の研究をしてきていた。そんな世捨て人のような老人と異能の力を持った青年が知り合ったきっかけは、ヴァチカンの禁術書を悪用しようとした人間を止めるためだった。それからというもの、彼にとって老人は知識を教えしてくれるよき師であり、仲間でもあった。

それから半年が経ち、彼等が再会したとき、青年は、前の戦いの仲間であり、彼女であった女性を亡くし、自らも二度と解くことが出来ない、という呪いをかけられていた。老人はそんな彼に自らが作った飛行船を貸し与えたり、年齢を重ねた者としていろいろとアドバイスをしていた。

その老人が、青年にある一言を囁いた。

……亡くなった彼女をよみがえらせる気はないか、と

青年は世の中の理を外れた事を言う老人の言葉に、何故か普通に信じようと言う気分になったのか、今度の戦いで得た仲間達とウェールズに飛び、老人に促されるがままに彼の家の地下にある一室に入ってしまった。

常人には理解不可能な機械が山と積んである部屋の一角に、彼は老人に指示されたとおり、先日エリザベス女王ゆかりの聖地で取ってきた月晶石をまるで壊れ物を扱うかのように慎重に置いた。そして、ゆっくりと視線を動かし、石の上にある透明な液体の入った培養タンクのような物を見つめた。ポコポコと細かな泡が立っているその物体をじっと見つめる彼の表情が薄暗い部屋を反映してか、ガ

ラス面がまるで鏡のようになって映し出されていた。その表情は、普段のある意味投げやりとも言えるやる気なさげなものとは一転して、真剣そのものでだれも寄せ付けない、と言わんばかりの空気を纏っていた。元々通常の人なら持ち得ない異能者故の彼の真紅の両目がより一層その雰囲気の際だたせていた。

「まだ何もしていないうちからそんなに気を張りつめてどうするんですか、ウル」

その場の緊張感とは全く正反対とも言えるのほほんとした老人の声に、ウルと呼ばれた青年は弾かれたように振り向いた。まるでミイラのようにひからびた風貌を持っているのにも関わらず目だけは少年のように輝いている老人はひよこひよこことウルのそばに近寄ると、彼の背中を安心させるような感じでぼんぼんと叩いて言った。

「大丈夫ですよ、加藤特佐が亡くなった思い人の復活を成功させているんです。貴方の思いはそれ以上なんでしょう？」

「…ああ」

控えめながらも力強く頷くウルの言葉に満足したように老人は、いくつかの機械を作動させていた。そして彼は、ウルがいる場所に歩いて彼の目の前に手を差し出した。

「アリスさんのDNA、つまり彼女の身体の一部は持ってないですか？」

その言葉に促されるように、ウルはウエストバックに手を掛けた。大事に包まれた紙の中からは幾筋かの銀髪が乗っていた。老人はピンセットで慎重に銀髪を一筋取ると、それを培養器の中に入れた。老人のしまつて良い、と言うジェスチャーに従うようにウルは手の上にあった銀髪を大事そうに紙に包み、ウエストバッグにしまった。培養器のおいてある場所から移動して、再びいろいろなランプが点滅する機械を操作する老人の背中にウルは不安混じりの声で問いかけた。

「なあ…本当に…大丈夫、なのか？禁断の秘術、だろ？」

その声に老人はくるりとウルの方を振り向くと、自分の胸に手を

当てていった。

「私を誰だと思っているのです？ロジャー・ベークンですよ。エミグレ文書を転記したのはこの私、と言うことは、一番この文書の中身を把握しているのもこの私にしか他なりません」

ロジャーと名乗った老人は、そうきっぱりと言い切ると、再び機械を操作し始めた。月晶石の光を乱反射して七色に淡く輝きながら泡が立ちこめる水槽を見つめるウルは自分の左胸に手を当てて言い聞かせるように心の中でつぶやいた。

「……大丈夫だ、加藤は川島中佐を桜花と言う形で蘇らせたではないか？アリスだつてきつと…」

「では、始めましょうか」

ウルのを思考をうち破るようにロジャーが声を掛けてきた。ウルは、心の準備が出来た、と言わんばかりに縦に頷いた。

「上手くいけばアリスさんは、亡くなった直前の記憶のまま復活します。彼女の感覚としたら永い眠りから覚めた、という状態でしょう」

ロジャーそう説明すると、普段のお茶目な表情とはほど遠い、稀代の魔術師、と言われるのが納得できるような真剣な眼差しを水槽に向け、両手を前にかかげるとゆっくりと呪文を唱えだした。

「ソレミウス…ソレミウス…ソレミウス…」

その言葉に応じるように月晶石は淡く青白い光を放ちだした。水槽の中は細かい泡が多量に発生し、その泡が徐々に寄り集まりだして形を作りつつあった。その動きを助ける、と言わんばかりに月晶石の輝きが微妙に変わりだし、それに呼応して泡は人型をかたどった。

「…！！」

人型をした泡が徐々にはじけていくたびに、銀色の揺れる髪が現れだしてきた。そして、現れつつあるのは、髪の毛だけではなかった。目を堅く閉じた女性の姿、すなわち、亡くなったアリス・エリオットの姿が徐々に形作られていきつつあった。

一度形が現れ出すと、彼女の造形を作り出す勢いはますます加速し、首、肩、胸、と形があらわになりつつあった。

……本当にアリスは黄泉返るのか…しかし…

ウルの内心にわずかな不安が影を落とした。その瞬間、彼の不安に呼応したかのようにピシッ、と言う音が部屋に響いた。

「…月晶石にヒビが…」

ロジャーがつぶやいた途端、一筋のヒビがだんだん大きくなり、石に深く亀裂を作っていた。そして、最後には、パシッ、という音と共に石は粉々になって崩れ落ちた。

「アリスっ！」

ウルの視線の先には、再生途中で止まったままの最愛の女性の姿があった。再生を助けた源であった月晶石が砕け散ったことで、彼女の身体はゆっくりと崩壊し始めていた。その上、死の匂いに釣られたのか、自分では姿形を取ることは出来ない低俗な怨霊とも言えるモノ達がアリスの身体めがけて群がり出しつつあった。

「消えろっ！」

彼女の身体を誰にも触れさせたくないと言う思いからウルは気迫をアリスにたかろうとするモノ達に飛ばした。その瞬間、悪霊達を従え胎内に封じ込めるハーモニークサーの性質故か、ウルの気迫におそれをなしたのか、それらのモノは一瞬にして霧散した。しかし、アリスの身体は彼女にたかっているモノを吹き飛ばしても、崩壊が止まることがなかった。ウルの脳裏に、半年前に味わった恐怖と後悔がよぎった。自分と一緒に居た人間が気がついたら冷たくなり、それが自分自身が原因だったという事が失ってから初めて判明し、ずっと後悔してきていた。その後悔の経験が全く役に立っていない、そして、自分は何も出来ないと言う無力感にウルの目の前が暗くなりかけた。

「ウル…」

不意に聞こえた優しい声に、ウルは慌てて水槽の中のアリスを見つめた。この声は絶対忘れることのない、もう一度是非聞きたかつ

た彼女の声だった。身体は徐々に崩壊していきつつあるにもかかわらず、彼女の表情は、ほほえみの形でうっすらと目を開け、まるで慈悲深い聖女のようなようだった。

「ア…リ…ス…」

彼女の目が開き、口がゆっくりと動かされたことに、ウルは信じられない、と言わんばかりに目を見開いてじつと彼女を見つめるだけだった。そんな彼女に対して、アリスは穏やかな笑みを崩すことなく、再び声を発した。今度は、ウルにはっきり判ってもらえるように、と言わんばかりにゆっくりと。

「ウル…愛しているわ…」

その瞬間、ウルの両目から本人が意識してないうちに一筋、二筋と涙がこぼれ落ちていた。自分のせいで命を落とすことになったのに、こんなふがない自分に対して『愛している』と言ってくれる彼女の懐の大きさと、どうして彼女が生きているときにウル自身が抱いていた思いをちゃんと彼女に伝えられなかったのか、と言う自分への大きな後悔が涙となって現れていた。ウルは涙目のまま、彼女の言葉にはっきりとした口調で返した。

俺も…と

その答えがアリスの耳に届いたのか、彼女はふわりと微笑み、その笑みのまま泡となって消え去った。その瞬間、ウルはがっくりと膝をつき、彼女が消え去った後の何も残っていない水槽を茫然自失で見つめているだけだった。彼の背後でロジャーが奇跡が起こった、とはしゃいでいるのさえ彼の耳には全く入ってこなかった。

式章 悪夢

緑の景色が美しい小高い丘の上にウルは一人たたずんでいた。周りには人の気配は全くなく、鳥が鳴く声が遠くに聞こえるだけだった。細かい草がまるで絨毯のように生い茂り、丘の頂上には目印、と言わんばかりに目立つ大きな樹木が立っていた。青々とした葉を付けた樹から漏れる柔らかな光がウルを照らしていた。彼は無言のままじつとある物を見つめていた。それは、小さな白い墓石だった。

アリス・エリオット、という名前の彫られた…

この墓を前にどれだけ後悔して涙を流したか数えようとするだけ無意味だった。もうすでにウルの中の涙は枯れ果て、これからどうしたらいいのか判らない、と言う虚無感しか残っていないかった。

「アリス…お前が死んでしまつて俺は一体どうしたらいい…？」

まるで捨てられた子犬のような目でウルは墓に向かって問いかけていた。そのとき、彼の背後から声がかけられた。

「ウル…」

その声は、間違えなくアリスの声だった。ウルは弾かれたように後ろを振り返つた。

「アリス…何故…」

木の陰からゆっくりと顔を覗かせたのは亡くなったはずのアリスだった。自分は幻を見ているのか、はたまた白昼夢なのか…

何も言えないままじつと見つめるだけのウルに、アリスは口に手を当て、くすくすと笑いながら言った。

「何故つて、貴方が黄泉返らせてくれたんでしょ…エミグレの秘法を使って」

その瞬間、周りの空気ががらつと一転して冷たいものとなった。

今まで暖かい光を放っていたはずの太陽の光も、一転して冷たく刺すような痛みすら感じられた。あまりの急激な変化に、自分の背に

冷たい、イヤな汗が流れるのを彼は自覚した。

不意に、彼はエミグレ文書がバチカンの禁書扱いとなり、アルバートが盗み出すまで封印してあったかを思いだした。たしか、エミグレ文書に記載してある方法を使って復活した人間は…

「貴方の望み通り私は黄泉返ったわ…ほら…」

そう言うと、アリスはウルの前に全身を晒した。ウルは顔面蒼白で、声も出せずに唇を震わせるだけだった。

死者を黄泉帰らせる、などという、神を冒瀆としか言いようのないことをして大きなしっぺ返しが来るのは過去の例で分かり切っていたはずだった。以前の戦いでロンドンに行ったとき、孤児院に連れ込まれた多数の子供の命を糧にしてジャックがママンを生き返らせようとした時も、クーデルカがロジャーと出会ったとき、ネメトン修道院での多数の人の命を糧に、暴漢に殺され命を落としたエレインを甦らせようとした時も…

どちらの結果も、世にもおぞましい、人間というのはほど遠い、知性というモノはかけらもない醜い化け物を現世に出現させるだけだった。

どうしてそれと同じ事を最愛の女性であるアリスにしてしまったのか…彼女の顔をした醜悪な化け物がゆっくりと迫ってくるのに、彼は声にならない悲鳴を上げた。アリスは猛禽類のような鋭い鉤爪のついた手をウルの方に差し出しながら彼を責めるような強い口調で言い放った。

「何故悲鳴を上げるの…そして…逃げようとするの…？私をこの姿にしたのは貴方じゃない…闇く冷たいところで眠りについていて私を無理矢理起こしたのは貴方よ！」

その言葉はウルの上に突き刺さった。彼に反論の余地は全くなかった。アリスの言っていることはすべて事実であり、自分のエゴだけで彼女をこんな姿にしてしまった…

ウルはそのままがつくりと座り込み、視線をしたに向けたままだった。彼は消えそうな声で彼女に尋ねた。

「そうだ…アリスがそんな姿になったのは俺のせいだ…俺がどうしたらお前は満足してくれる…？」

アリスは下半身からまるで蜘蛛のように生えている鋭い足をウルにすぐそばに突き刺した。その風圧で頬に切り傷が入り、血がじわじわとにじみ出した。ウルはゆっくりと顔を上げ、彼女を見つめて口を開くのを待った。

「ウル…」

「ウルっ！」

「ウルさんっ！」

アリスの声に聞き覚えのある別の声が複数被さった。そして、身体を揺すぶられる感覚に、ウルは今までのことはすべて夢だ、とはつきりと自覚した。彼がゆっくりと目を上げた先には、心配そうな表情でのぞき込むカレンや蔵人をはじめとする、今の戦いを一緒になつて戦つてくれている仲間達の姿があつた。

「あ…」

喉がからからになつているのか、かすれた、引っかかったような声しか出てこないウルに、カレンが冷たい水が入ったコップを差し出した。

ウルは礼もそこそこにひつたくるようにそのコップを取ると、一気に中の水を飲み干した。そして、ため息を一つついて、空のコップを横に置いた。

「ウル、貴方すごくうなされていたわよ…大丈夫？」

カレンの質問にウルは苦笑いと共に返事をした。

「ああ…こんな変な体質だからかな…うなされるのはよくあることだからみんなは気にしなくても大丈夫だ」

世の中に充満する悪意を胎内に封印する性質があるハーモニクサー故、悪夢に襲われやすい、というウルに、彼の従兄弟であり、同じハーモニクサーでもある蔵人は眉をひそめた。

どうも、ウルの回答がハーモニクサーだ、と言うことを隠れ蓑にして肝心なことをはぐらかしているような気がしたからだ。し

かし、彼がうなされた悪夢の内容を知っているのは彼自身だけであり、彼が自分から口を割らない限りは、周りの人間は心配するだけしか手段はなく、結局どうすることもできないのは、はっきりとした事実だった。

「まだ夜中じゃねーか…悪いな、俺のせいでみんな起こす羽目になっちまったか？」

ウルの明るい声で、仲間達は彼がとりあえずは大丈夫そうだと思いい、再び眠りにつくべく、それぞれの布団に潜り込んだ。しかし、肝心のウルは、布団に戻ることもなく、すっと立ち上がると、ふすまに向かって歩き出した。

「ウルさん、何処へ？」

未だ心配して訪ねてくる蔵人に、ウルは両手をポケットに入れたまま振り返って言った。

「ちよつと小用。冷たい水は気持ちよかつたんだけど身体が冷えちまったからな」

そう言うのと、彼はそつとふすまを開け、部屋の外に出ていった。

しかし、小用、と言って出ていったくせに、ウルは夜が明け、朝になるまで戻ってくることはなかった。それから言うもの、彼は、睡眠時間前になるとふらりと姿を消し、戻ってくるのは朝になったから、という状態を繰り返すようになった。

そんな彼の行動に、仲間達は心配の目を向け、忠告や意見をするのだが、ウルは、判っている、大丈夫だ、の一点張りで全く周りの仲間の意見を聞くことなく、毎夜のごとく姿を消すことをやめることはなかった。

明るい日が射し込む犬神家のテラスで彼等は咲が用意してくれたお茶を飲みながら、ウルが居ないことを良いことに彼の話をしていた。

「どうしたらいいのかしら…このままではウルが潰れてしまっわ…」カレンはため息と共に、回答を伺うような視線をウルの叔母である咲に向けた。彼女もため息と共に答えた。

「蔵人に頼まれて、遠見で見てもたけど…彼、ずっと風の里の崖の上に座って月を見続けて一夜を明かしていたわ…」

「やっぱり…全く寝てないなんて…どうしたらいいかしら…」

その場にいる者達はため息を繰り返すしかなかった。

ウルは周りが心配しているのを察して、自分のことは気にするなとばかりに、明るい、脳天気なことを言ってくるのだが、目の下に出来たクマと急激に落ちた食欲がそれらの行動を裏切っていた。その状態をあまりにも見かねた蔵人が、男同士、と言うのと血縁だ、と言うのを理由にしてウルから睡眠を拒否する事情を引き出そうとしたのだが彼ははぐらかすだけで絶対に蔵人の質問には答えようとはしなかった。

「どうしたらいいんでしょうか…強制にでも何らかの手段を使って眠らせるべき、でしょうか…」

ため息混じりにつぶやいた蔵人の言葉に、アナスタシアが良いことを思いついたとばかりにぽんと手を叩いていった。

「ほら、ルチア、貴方確か…占いするときに客がリラックスして落ち着けるようになってアロマセラピー使ってたわよね」

「うん…たしかにいゝリラックス効果のあるハーブ類から取ったエキスをブレンドして使ってたことはあると思うんだけどおゝそれとどう関係があるのお？」

ルチアの相変わらずのほほんと言うか、おっとりとした口調に、アナスタシアは机を指でコンコン叩きながらため息と共に言った。

「ルチアって意外と頭の回転鈍いわねゝリラックス効果のある香りがあるなら、睡眠を促す香りはないの、と言いたいのよ、私は」

ルチアは暫く考え込んでいたが、いくつか思いついたエッセンシャルオイルがあったようで明るい表情で立ち上がると、彼女等に言った。

「ちよつと待っててねえゝ、いいの思いついたから今から調べて来るからあゝ」

そう言うと、彼女は自分の部屋にいそいそと戻っていった。それ

を見送りながらゼペットがぼつりと尋ねた。

「で、香りをルチアに調合して貰うとして、それをどうやってウルに嗅いで貰うんじゃ？お前さんら女性と違って奴は自らそういうのをつけたがらんぞ」

鋭い指摘に皆はそのまま考え込んでしまった。その時、アナスタシアは皇女には似つかない、黒い笑みを浮かべてヨアヒムの方を見ながら言った。

「こうなったら強制手段としてウルを羽交い締めにして彼の顔にルチアの作った香りをしみこませた布を当てるしかないのかしら…」

「ちょ…ちょつと待たつち。その視線は、ウルを羽交い締めにする役を俺がする、と言いたいわけだつちか？」

アナスタシアの視線に気がついたヨアヒムが一步、二歩と引きながら彼女に質問した。尋ねられたアナスタシアはにっこりと笑みを浮かべて縦にうなずいた。

「冗談じゃないだつち…俺がウル押さえ込む、前にぶっ飛ばされるだつち…」

半分涙目で泣き言を言うヨアヒムに、蔵人が助け船を出した。

「じゃあ、代わりに僕がウルさんを押さえ込む役をしますから」

「そんな…駄目ですわ！蔵人様に危険なことをさせるなんてっ」

アナスタシアは蔵人の発言に慌てて反論した。しかし、蔵人は穏やかな笑みを浮かべながらアナスタシアに言った。

「大丈夫ですよ、こう見えても僕の腕力はウルさんよりも強いくらいですから」

「でも…」

心配するアナスタシアに蔵人は大丈夫だ、と言わんばかりに力強く頷いた。そのやりとりにほっとため息をついたヨアヒムにゼペットが皮肉を言った。

「吸血鬼と言う割には役にたたん奴じゃの」

ゼペットの言葉にヨアヒムは自分が吸血鬼だった、と言うことを思い出した。彼はゼペットの腕をおもむろに取ると、ぶんぶんと振

り回して感謝の言葉を述べた。

「さすがゼペットだっち。俺が吸血鬼だったことを忘れていただっち……良い手段を思いついただっち」

「良い手段、ってどんな？」

カレンの問いに、ヨアヒムは胸を反らせて自信満々に答えた。

「俺のドレインだっちでウルを弱らせれば押さえ込みは簡単だっち」
「何でそれを早くに思いつかないのよ」

鋭いつっこみを入れるアナスタシアの背後で力任せに腕を振り回されたゼペットは顔をしかめながら自分の腕をさすっていた。その時、ミユールの足音と共にルチアが部屋に戻ってきた。

「えへへ〜完成〜今回はかなり気合い入れて作ったから自信作だと思っただあ〜」

そう言う彼女の手にはガラスの小瓶に入れられた液体があった。

ちよつと香りを嗅がせてくれる、と言う女性陣のために、彼女はテスターに小瓶の中身を一滴垂らすと、軽くそれを振った。その行為だけでほんのりと香りが寄ってきた彼女達の周りに広がった。

「これはラベンダーの香りね」

「うん。ラベンダーとカモミールをベースにいろいろ組み合わせしてみましたあ〜あんまり嗅ぎすぎると自分が本当に眠くなっちゃうと思っただあ〜」

ルチアはそう言うと、小瓶をカレンに差し出した。彼女はそれを受け取ると、それを蔵人に渡した。蔵人は香水の瓶を大事そうに懐にしまつと、皆を見た。その時、ブランカが外の方を向いて軽くほえた。

「ウルが帰ってきたの？」

カレンの問いかけにブランカはバウツ、と一声ほえて彼女の言葉を肯定した。

「じゃあ、これから決行しましょうか。たぶん今ならウルは全く警戒していないでしょうから」

咲の言葉に仲間達は大きく頷いた。暫くすると、階段を上っていく

る足音がし、ウルが姿を見せた。

「みんなどうしたんだ？こんなところで集まって」

きょとんとした表情で周りを見回し、尋ねるウルにカレンは逆に尋ね返した。

「そう言う貴方は何処に行ったの？髪の毛濡れているわよ」

その言葉にウルは一瞬、ヤバイ、と言わんばかりに表情がこわばったがそれをすぐに消すと、いつもの軽い口調で言った。

「宿禰の泉で水浴び…気持ちよさそうに見えたからつい、な」

「気持ちよさそうって…貴方季節判って言ってる？まだ水浴びするには寒いわよっ」

アナスタシアはそう言っって顔をしかめた。彼女の指摘通り、いくら日が暖かくなったとはいえ、今はまだ5月であり、山奥である犬神の里の泉の水は刺すような冷たさを未だ保っていた。それを象徴しているのが、ウルの色だった。寒さに血色が悪くなっている唇を見て、そこにいた者達はウルの水浴びの本当の理由を察してため息をついた。

「寝ないために水を浴びた、という…」

「な、なんでみんなため息ついているんだよ？」

ウルはきよるきよると周りを見渡して小首を傾げた。その言葉と態度を本気でやっているのか、計算でやっているのか考える気もなくなったアナスタシアはヨアヒムにちらりと視線を走らせた。

「ウル、恨まないで欲しいだっち」

その言葉と同時にヨアヒムの目が金色に光り、ウルにぶつけられた。その瞬間、ウルの手がぐんと抜け落ち、彼は膝をついた。

「ヨアヒム…てめえ…なにしゃがる！」

ウルはまるで敵を見るようなきつい視線をヨアヒムに向かって投げかけた。しかし、次の瞬間には、彼は蔵人に背後から羽交い締めにされていた。

「おい、蔵人、お前まで何する気だ！」

首だけ後ろにねじ曲げ、ウルは理不尽なことをされるといふ怒りにより鮮やかに血の色に近づいた真紅の両目を蔵人に向けた。しかし、蔵人はそれに構うことなく、ヨアヒムがドレインだっちをウルに仕掛ける間に、ルチアから受け取った香水を十分しみこませたハンカチを取り出し、それをウルと口を覆うようにかぶせた。

「なっ……」

強制的にウルはルチア特製の香水の香りをたっぷりとかがされる羽目になった。全身が倦怠感に襲われ、意識が混濁しつつあった。

彼の身体から抵抗する力が抜け落ちたことを察した蔵人はハンカチを彼の口から離れた、ウルは頭を振って意識をはっきり保とうとしながら蔵人に尋ねた。

「蔵人：お前一体何をした……」

「これも貴方のためです。ルチアさん特製の睡眠効果の高い香水を貴方にかいでもらいました」

静かな口調でいう蔵人とは対照的にウルは怒りと恐怖が入り混じった表情で彼を睨み付けていった。

「よけいなこと……するな……」

「よけいなことですって！蔵人様になんてこというのっ！」

自分たちの行為を否定するようなウルの発言にアナスタシアは思わず怒りの声を上げた。しかし、ウルは蔵人の腕をまるでおぼれる人間がつかむ命綱のように強い力で握りしめようとしていた。

「……駄目だ……寝ては……取り……こまれて……」

ウルはつぶやき声と共に、蔵人の腕の中で意識を無くした。ウルを抱きかかえなおしながらも、蔵人は先ほどの彼の言葉が気になり、表情が陰しくなった。

彼は何に取りこまれる、と言って怯えなければならなかったのか……彼のためによかれと思っただけが逆効果になってしまったのではないか……

しかし、その答えを出すものは何もなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0637x/>

幽玄回廊

2012年1月2日01時46分発行